

支えきれない哀しみ

石塚八重

生きていくことの幅が、わずかずつ狭まっていくようになった。人間の無力さ、限界の厚い壁はびくともしない。

いのちのせめぎ合いのどん底から自力ではとても這い上がれない者に、遠く近く、寄せては返す波のように、止むことなくささやきかけられることばがあった。

「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」と。生きていくからこそその「いのち」ではないか。別れを選んだ。

相手の背負っていた苦悩の重さゆえに、それを支えきれなかった者に残された哀しみの、果てしなさ。御前に鎮まる。うらみ、つらみはない。涙があふれた。

母親との確執がやつと解きほぐされたことを風の便りに知らされ、安堵した。

途に行き昏れし者たちをたずね歩きつづける方の足音が、たとえようもなく哀しく響いてくることがある。